

終戦は小牧で迎えました。陛下の放送をラジオで聞きました。内容が判然としませんでした。隣接の海軍部隊から共同抗戦継続の申し入れがあり、終戦を確認しました。終戦時、軍曹に進級しました。

復員時、父母も弟妹も元気で私を迎えてくれました。私の無事帰還はこの家に大黒柱が蘇生した喜びがありました。

戦後農業を家業として今日に至っています。昭和二十九年結婚しましたが、息子が三十歳で他界し、娘も他家に嫁がせましたので、私たち八十歳近い老夫婦で助け合いながら農業を守って老後を送っています。

## ラバウルに生き残る

### 第五航空通信隊

愛知県 秋田 森 治

私は、今は名古屋市中村区稲葉地町というが、当時  
は西市場といわれた所の、農家の次男として生まれま

した。兵隊に行く前は名古屋の松坂屋に勤務していましたが、戦時となり、中村の日本赤十字病院に勤務替えしました。その時ポイラーの技術を身につけ一級汽缶士の免許を取ることができました。

昭和十七年になると同級生の多くは現役兵として入隊し、私に召集令状が来たのは十月でした。入隊は十二月一日で、三重斎宮の第五航空通信隊でした。初年兵教育は三カ月で終了しましたが、私は体が少々弱かったためか練成中隊に入れられ、二カ月で一等兵に進級しました。

忘れもしない、昭和十八年五月、山本五十六連合艦隊司令長官の国葬の日に宇品を出発、途中パラオに寄港、ラバウルへ向かう航海を続けました。もうその頃は制海・空権は連合軍に奪われつつあった時でした。

私は通信專業の兵隊ですから初年兵教育といっても歩兵のように戦闘教練や銃剣術・射撃・体操というのはほとんどなく、毎日が通信に関する教育で、トントーンという音教法での教育でした。ですから三カ月

間は毎日学校へ行っているようなものでした。

内務班に古参兵は一、二人と少なく、初年兵が多かったのですが、一個班三〇人ぐらい、随分と気合がかったっていて、ビンタは毎日でした。少しでも敷布が汚れていれば、赤いチョークで金魚の絵が書かれていたり、枕カバーを頭に被せられ、食器袋を口にくわえて他の班を回らされました。各班の古参兵からのビンタもあり、頬がパンパンにはれてしまった人もいました。また、革の上靴（上ばき）で叩かれ顔の形が変形してしまふ者もいました。やる人もやられる人も常習犯がいて、いつも決まった人達でした。

練成中隊は通信班と暗号班、対空無線機関（送信所）と三カ所に勤務が分られました。私は通信が多いので受発信でした。このように練成中隊の教育が二カ月で終了しての出港でしたが、丁度その日、内地最後の日は休日であったため、別れの酒の一杯も飲むことができませんでした。

話を戻しますが、運良く空襲も攻撃も受けずパラオ

港へ入ったのですが、椰子が生えており、これが南方かと思うほどきれいな風景でありました。

輸送船の「秋津丸」は仮設航空母艦を改造したとかの相当大きな船でした。船内には大・小の部隊が乗船していましたが、パラオに寄港しても上陸はできず、補給が済んだら出港でした。内地を出る時は駆逐艦二隻が護衛をしてくれましたが、パラオからは単独行動です。不安でしたが、「秋津丸」は速度が二〇ノットというから、普通の輸送船に比べ速かったので、途中「潜水艦発見！」となると蛇行しながら航行しても、速力は早いので潜水艦が追いつかないとのことでした。

ラバウルへ無事到着、港から四、五キロメートル先の山へ行き、南崎連隊本部へ集合し、各中隊はそれぞれ展開しました。各班は一個分隊ずつ各飛行場に派遣されましたが、ロレンゴーの一個分隊は敵上陸のため一番早く玉砕してしまいました。運命の分かれは今後も続いていきました。私等は第四航空軍通信隊に二個分隊展開しました。残った分隊はニューギニアに展開

しました。その人達はほとんど生き残れませんでした。ラバウルの反対側のツルブに敵が上陸したので、海岸伝いにラバウルへ帰ったのは一個分隊だけでした。本隊の主力はニューギニアへ転進しました。私は分遣隊末端の通信隊となったので助かったのです。その後、ラバウルでは壕を掘り通信をしていました。

空襲は毎日、定期便のようにあるのですから当然犠牲者は多くなりました。最初のうちは、ラバウルから零戦が飛び立って応戦していましたが、三カ月後には飛行機は皆トラック島へ行き、以後制空権は敵の手に渡り、毎日、空襲、空襲の連続でした。しかし、空襲が激しい割には、犠牲は少ないようでした。我々はその度ごとに退避し、防空壕、地下要塞も出来ていたからか、人間の損害は少ないようでした。

その後我々は軍通信隊に編成され、後には陸上の正面部隊となりました。飛行場大隊や通信隊など、小さな隊は編成替えとなり、皆地上部隊の歩兵隊となったのですが、私ら一個班は軍飛行隊に残りました。通信隊は必要な隊であるからでしょう。特に虎の子という

べき一〇〇式司令部偵察機が一機だけ残っているの  
で、その整備班と我々通信隊一個班が必要なのでし  
た。

その後、ラバウルは取り残され、敵は北西へと、口  
本本土へ向けて進攻していききました。そのため自給自  
足の農耕班を編成、食糧確保が主な任務となりました。  
ラバウルには陸軍の物資が比較的多くあり、自給  
自足できるようになりました。

そのうちに各隊は決戦体制に部隊編成され、陸正面  
からの敵に備えるようになりました。連合軍の上陸作  
戦に備えることです。海に面した所は陣地構築して  
あり、大きな山の中に地下道を掘り決戦体制は整って  
いききました。

そのためか連合軍は要塞化しているラバウルを避け  
て蛙飛び戦法で来たので我々は助かったのです。備え  
あれば憂いなしという言葉がありますが、もし敵がラ  
バウルに上陸したら、敵の損害は多かったですでしょう。  
それほどラバウルは堅固な要塞になっていたのです。

ラバウル方面（ニューブリテン島など）に対する攻

撃が盛んになったのは、ブーゲンビル島で山本元帥機がP38戦闘機に撃墜されたからだそうです。私が内地を出帆したのは、先に申した通り、山本元帥国葬の日ですから、後に上官たちから聞いた話です。

終戦間近になると、ニューギニアの本隊からの受信は防空壕で受けていました。毎日「敵上陸」「通信所へイリ閉鎖」の受信が多くなりました。敵が上陸したので本隊は山へ入ったのでしょう。その後通信所は閉鎖され、ラバウルの軍通信に編成されました。そのため我々は今村軍司令官の近くで通信をしていました。

通信所はマンガアの並木の所にありましたが、その後は山の上に登り、五号無線器で通信出来るよう訓練をしていました。軍通信隊は機材の方へ転属した者と、通信業務のみとに分かれ、私は通信をやりながら防空壕を掘り決戦体制に備えていました。

そのうち、歩兵へ転属する者もあり、飛行場大隊を主力とし、混成第六連隊が編成され、その隊に行った者もありました。無線班は用も無くなり、食糧増産に重点をおき芋作りに専念しましたが、気候も土地も適

していたためか、三カ月で収穫できるようになり、食糧増産、備蓄により決戦に備えていました。

稲も植えました。米ができるで一升ビンに入れ棒で突いて脱穀したり精米しました。パイアやパンの実も取り、椰子の実は椰子水を冷やして飲み、次には実の内側が「イカ」の代用になり、終わりにはコプラとなります。ラバウルは広く山には多くの植物があり、里芋に近いタロ芋も取れ、焼いて食べました。

終戦間近くなっても哨戒機が巡って来るので、うっかりすると銃撃されるから安心は出来ません。私も通信で歩いている時や、トラックに乗っていて銃撃されたことがあります、常に警戒していないためにやられた者が随分多くいました。哨戒機さえ気をつけていれば良かったのですが。(敵は我々のラバウルを置き去りにし、監視しつつ釘付けにしていたのです)

終戦の情報はすぐに入りましたので、連合軍が上陸する前、糧秣廠から物資を持って来たり、手榴弾で魚を捕り副食としました。部隊ごとに自分で幕舎を作りました。後になって集合命令が下達され、豪州兵が多

数上陸して来ました。その後、豪州兵に使役を命ぜられたり、掃除の手伝いなどさせられました。待遇はまあまあで、我々は栄養失調にもなりませんでした。

復員の時、私物検査があり、時計や万年筆など取られました。あまりトラブルも無く、米軍の上陸用船のリバティーで名古屋の三菱重工大江工場の岸壁に着いたのは昭和二十一年五月十八日でした。上陸すると、頭から殺虫剤のDDTをかけられ、諸手続きをして、一日後に復員、私は電車で帰り、夜七時頃家に着くことが出来ました。

家の者は、突然の帰国であるので皆びっくりしてました。復員の時、軍曹の二等級として、たしか、千五百円と、旅費を五百円もらったように記憶していますが、五百円は現金で、他は封鎖されたのだと思います。

昭和二十三年、中日新聞社に入社、昭和五十三年、定年退職。引き続き日本開発へ出向、諸役職を経て昭和五十九年六月、退職。昭和六十一年四月より平成七年二月まで、中京大学武道学科講師として勤務しま

した。

しかし、私の戦後は剣歴に代表されると申してもよいかも知れません。竹刀を握ったのが、昭和十一年、十四歳の時でした。趣味というより、人間形成と体力増進に役立つと信じて、近くにあった中道場で稽古に精進しました。その後、太平洋戦、ラバウルでの対空二号無線で通信作業に従事、連日空襲に悩まされつつ軍務に尽くしたことが、現在の剣の道を六十年継続させた原動力になっているものと確信しています。

現在まで健康で、幾分なりとも、斯道のために尽くし得たことを幸せと思いつつ、亡き戦友の御霊安かれと祈る日々であります。

### 【解説】

秋田氏の入隊した第五航空通信連隊（真第九九四一部隊）は、東部ニューギニア中部ウエワク北方のムッシュ島に本部を置いた。

編成、昭和十七年六月一日、於満州チチハル。航空通信第五連隊を改称。十二月五日、チチハル出発。十

二月三十一日、ラバウル上陸、主力ラバウル、一部をニューギニア、ソロモン方面に展開。

十八年八月二十五日、第二航空通信連隊の有・無線各一中隊を指揮下に入る。九月主力ウエワクに移駐。

十九年一月主力ホランジアに向け出発。

四月サルミへ移動。十二月第三六師団(雪兵团)の指揮下に入る。

二十一年一月十八日浦賀上陸復員。連隊長大佐中山真積(陸士第三〇期)。

#### 混成第六連隊の略歴

昭和二十年四月一五日 軍令陸甲第六七号

中改正により編成完結

一対空艇及陸正面戦闘準備

ニューブリテン島ラバウル鏡原において敵空艇部隊及陸面より来攻する敵に対し撃滅を期し、之が作戦を準備す(築城、現地自活、保健)

連隊長 大佐 永井 元以下九八七人

第一大隊は鏡原にて対空艇及陸正面戦闘部隊

大隊長 大尉 野溝 正章以下四三七人

第一中隊長 大尉 天野 久弥以下一三〇人

第二中隊長 大尉 山田 文夫以下一三〇人

第三中隊長 大尉 堀 勲以下一三〇人

第二大隊はタキレンにて対空艇及陸正面戦闘部隊

大隊長 少佐 川島 吉郎以下四三七人

第四中隊長 大尉 田尻 晴彦以下一三〇人

第五中隊長 大尉 佐藤 勇以下一三〇人

第六中隊長 大尉 黒木 勝以下一三〇人

復員

終戦後軍監督の下に集団設営を実施鏡原において集団生活をなす。

昭和二十一年四月下旬 ニューブリテン島ラバウル

出帆。同月二十九日、浦賀港上陸。五月一日、復員解隊す。